2019年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2021/4/1

団体名	NPO法人市民協岩手	活動タイトル	「防災減災を内陸の子ども達に広げる」プロジェクト2019

望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）

●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	●ビジョン 「被災者から『学ぶ・教える・伝える』防災減災著作の読み聞かせと講演による交流を通し、岩手県の子ども達が自分の命を守る力を身に付ける」 ⇒内陸地域の小学生が、自分の住むエリアの防災減災に関心を持つ。
●団体の社会的役割（ミッション）	●ミッション 「いつどこにいても自分の身を守る知識や技術と、子ども達も地域の一員であるという礎を築く」 ①小単位から始めモデルケースとすることで、いずれ岩手県内全域に活動と効果を波及させる。 ②距離という物理的な問題から、震災の教訓が内陸地域で生かされているとは言い難い面を改善する。 ③内陸の小学生は子ども同士で被災者より直に学ぶ体験から、子ども目線で震災の教訓と地域の危険箇所を把握し、その危険にどう対処したら良いか自ら考える力を育む。
●団体の活動基盤	●人材育成⇒活動を通しボランティアを募り、関心や志の高い人物にスキル向上やノウハウ提供を図ることで、活動普及の際に活躍できるようにする。 その後も活動により、子ども達と共に学び共有した知識や技術をもって、恒久的に地域や社会に還元を可能にする。 ●リソースの確保・活動資金⇒むこう3年は活動立上げと普及の期間となるため、助成金確保を中心とする。 活動の展開や広報を通じ、企業等からの寄附や協賛を増やしていくことで同時に地域と企業の関係性を顔が見えるものにする。 また3年以降は、学校単位の取組み実施をめざす。 ●ナレッジ⇒行政・学校等において個々かつ単発の防災減災教育活動事例はあるため、連携・共有により活動に生かし、取りまとめを進める。 その体系化と記録を重視し、ノウハウやスキルを求めに応じ、即提供可能なものにしていく。

■活動風景

講演会

スライドを使い、震災時～過去の歴史～復興過程まで聴きました。

「ハナミズキのみち」読み聞かせ

絵本ですが、大人にとっても深い内容で目に見えない心で感じる部分も多い内容となっています。

■活動報告

●当初の事業計画では、陸前高田市への合宿と盛岡市での学習の二本立ての防災減災体験学習であったが、新型コロナ感染症対策により、活動の規模の縮小と大幅な計画変更を余儀なくされる状況となった。
●計画変更にて、リモート/動画配信の対応準備と並行し、盛岡市立飯岡小学校と被災者で絵本作家/ハナミズキのみちの会代表の淺沼 ミキ子氏の協力で、読み聞かせおよび朗読会を開催した。
●令和2（2020）年10月17日に挙行、その後コロナ感染等のトラブル発生なく無事開催となり、子ども47名/教職員等13名の計60名にて当初計画の半分以下の規模ではあったが朗読と講演会を実施した。
●体験型の事業計画の性質上から開催内容について調整そのものが難航と変化する感染状況に左右され実行可能か不透明な中で最小限で可能な限りのものとなってしまったが、内陸に住む子どもは沿岸に行ったこと自体がない者も多く震災への知識関心以前に危機管理など基本的な意識について非常に薄いことが判明し、今後子どもを主体にした恒久的な防災教育活動の必要性の裏付けや地道な草の根活動が効果を奏する結果の証明とできた。

■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)

●コロナ禍という障壁があったが、子どもにとっても災害下に類似しており、「沢山の我慢を強いられ閉塞感が漂う中で、新たな試みや外部の人間との関わりを持てたことが有意義であった」等、学校側から感想が寄せられた。
少また、人数の開催で当初の目的の一つであった交流による子どもの心の醸成には始めから限界を感じていたので、普段指導している教職員の立場から見て心の変化・向上についての、アウトカム目標を達成できた。
●当初は、参加者は直接被災地を訪問し、現地で実感を伴いながら被災者から話を聴くことを予定していたが、参加者への事前アンケートを実施したところ、防災への意識の低さや家庭での災がいへの取組みの差異が浮彫りとなり、どのようにしたら臨場感や危機感を伝えることができるのか、講師の淺沼氏と検討し、震災を経験していない子どもたちに対しては、直接的強い表現をあえて言葉にして伝えるよう工夫したところ、震災の悲惨さと命だけは守らなければならないという実感が得られ、体験の共有と気付きにつながり、自分のこととして災害を捉え考えることができた。また初回事業実施により、新たな課題や改善点（日常との結付け/集中して取組めるプログラム構成等）が見えてきたことで、「被災地沿岸→内陸→全国」へと防災教育を広めるためのプロセスを再構築し、事業を進める新たな目標も見えてきた。

■事業を通じて得られたノウハウ

●イベント開催において、様々な手法で検討でき、直接開催/リモート/動画配信と、多岐に渡る手法で準備を進めるのは困難を伴うが、いつどこでも開催できる可能性を広げにもつながった。

●学校側は年間行事の実行や運営で精一杯であり、子どもに防災教育含め学習以外にも子ども達に直接関わってくる地域や未来に関わる事柄も伝えたいという思いは非常に強いものの、他の業務に追われ、担当できる人材が不足していることが課題である。そこで、当法人がにコーディネート役が入り、学校側と話し合いを重ね、計画/実行をすることで、学校の年間行事に組込んで学校独自の継続した活動にしていくことにつながった。今後は、読み聞かせや講演活動による防災教育活動に限らず、学校のニーズをくみ取りながら、本取組みを進める。

■望ましい社会状況を達成するための課題

●災害への知識・態度は、子どもたち一人ひとりの差が大きく、十分に命を守れる判断を持ち合わせている子ども／知識等を持ち合わせていない子どもの差は開いている。今後は、「命だけは守る/二度と犠牲者を出さない」という震災の教訓を後世に伝え残していくためにも、将来を担う立場の子どもたちの危機管理能力を高めることを目標とし、多方面と連携して防災教育の場をつくる。

●コロナ禍により、学校生活含め日常の活動そのものを制限されている子どもが多く、疫病も災害に類似した環境や影響をもたらすといえる。また、災害時のとっさの行動や避難生活は、普段の行動や考え方が反映し、普段やっていることや自分が知り得ること以上はできない。疫病の流行で生活様式が大きく変容した中で過ごす子どもは、我慢の一方で感染に配慮しながら外遊びなどに自然と工夫をこらしており、それは子ども独自の危機管理や内的適応行動の一環といえる。弁護士らにより感染症を災害として加えることが提言されているが、コロナ対応が日頃からの防災意識を高めることに通じ、同時に防災意識や備えは疫病などにおいても命や生活を守る点に役立つと考え、今後の活動内容を進化させる。

■活動成果のアピールポイント（自由記入）

この1年間の活動を通じて	体験の共有から自分のこととして災害を捉えること	を達成しました。

■受益者の具体的な変化（自由記入）

読み聞かせ・講演会の経験をきっかけに、陸前高田市を訪問した子どもが３名であった。コロナ禍で外出が制限されている影響もあるが、淺沼氏から聴いた話や絵本のことが「自分のこと」として感じられ、防災意識が高まっている。